

平和に向けて私ができること

師勝中学校 三年 山田 亜弥

一九四五年八月六日午前八時一五分。一発の原爆が広島に落とされました。その瞬間、人、建物、全てのものが消え去りました。

初めて訪れた広島平和記念資料館で、私は心が押しつぶされそうになりました。皮膚が溶けてどろどろになった人の写真、折れ曲がった鉄骨や瓦、焼け焦げたお弁当と制服。社会科の教科書やテレビを見て知っているものとは比べものにならない悲惨な光景を前に、私は呆然と立ち尽くしてしまいました。

様々な展示の中で、一人の被爆者、佐々木禎子さんのことが強烈に印象に残りました。原爆投下後もしばらくは元気に暮らしていましたが、小学校六年生のときに被爆したことで白血病を発症し、中学校には通えず十二歳で亡くなりました。私と同年代の子がそんな病気になり、学校にも通えなかったことがどれほど苦しいか想像するのも辛いです。たまに学校に行くのが面倒だなと思っただことがある自分が恥ずかしくなりました。普通の生活をし、普通に学校へ通えることがどれほど平和でありがたく、幸せなことを気付かされました。そして、罪のない子どもの命まで奪ってしまった原爆に憤りを感じました。

翌日、「広島原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」に参加しました。六十八年前のこの瞬間、ここにあった命や希望、全てのが消え去ってしまいました。包帯を巻かれた赤ん坊やその赤ん坊に母乳をあげる母親の姿や痛みに顔をゆがめ苦しんでいる姿。黙祷をしながら、私の頭には資料館で見た光景がよみがえりました。参拝のときに涙ぐみ、ずっと手を合わせている方を見ました。その姿を見て、原爆が起こした悲劇は今もなお、人々の心を深く傷つけているのだと思いました。

平和とは、一体何なのでしょう。安心して生活できること、笑顔で暮らせること、人々がそんな平和を願う中、世界では今この瞬間にも、内乱や紛争、戦争に原爆が使用される危機性をはらんでいます。平和のためには原爆は絶対にあつてはならないはずなのに、この現状にとても歯がゆい思いがします。

平和の使者として、私は自分の国で起きた悲劇について、知らないことが多すぎたと痛感しています。今年で「あの日」から六十八年が経ち、被爆者の方々平均年齢が七十八歳になりました。被爆者の方々が成人し、親となり、祖父母となり、どんどん時が流れています。記念式典では、被爆した祖母から聞いた原爆の恐ろしさについて語る小学生の姿に、胸が締め付けられる思いがしました。この原爆によって起きた悲劇を風化させないために、私たちができるとは語り継ぐこと。実際に体験された方々が減ってしまうからこそ、今回見えてきたこと、聞いたこと、感じたことをできるだけたくさんの人に伝えたいです。原爆が起こした悲劇、そして平和の尊さを。

平和の鐘

西春中学校 三年 米谷 佳奈

今、みなさんは幸せに生きていますか。

私には、それぞれがやりたいことをし、毎日を充実して過ごしているように見えます。まるで、戦争がなかったかのように。私も、そんなふうにも通りの生活を送っていました。六十八年前の、あの悲劇を広島で知るまでは。

私は、平和記念式典が行われる広島を訪れました。今もなお、平和記念資料館で見た光景を適切に表現する言葉が、見つかりません。何とも言えない感覚に陥りました。全てにおいて、衝撃的でした。

八時十五分で止まった時計、焼け焦げた制服。黒こげになった弁当……。信じがたい事実がそこにあつたのです。原爆によって、大切な「生命」が一瞬で消える恐怖。それに対する人々の怒り。展示されている品々を通して、それらは私の心に深く刻まれました。

戦争は、武力を行使した国家間の争いであり、国民すべてを巻き込み、私たちの幸せな生活を奪っていきます。人類史上、初めて原子爆弾が投下された「広島」。たった一発で、約十四万人という尊い命を奪いました。被爆者の中には、体に深い傷を負ったまま、苦しんで亡くなっていった方々がいます。「被爆者」という差別を受け、心の傷が消えることなく生きている方々もいます。

被爆者は、平均年齢が七十八歳を超えても、「原爆という過ちを、二度と繰り返してはならない」と、平和のバトンを次の世代につなぐために、懸命に努力しています。私たちも考え直さなければなりません。原爆を。戦争を。

八月六日、午前八時十五分。平和の鐘が鳴り響くとともに、黙祷を捧げました。私には、その一分間がとても長く思えました。

このように、多くの人々を傷つけ、罪のない人を犠牲にする戦争は無意味であり、核兵器のない世界になることを強く望みます。

そのためにはまず、人と人、国と国とが互いを思いやり、協力することが大切です。また、被爆者の体験や訴えを直接聞く機会を持つこと、そして、戦争の惨禍をもっと知ることが必要なのではないのでしょうか。

式典で読まれた「平和への誓い」の中に、

平和とは、安心して生活できること。

平和とは、一人一人が輝いていること。

平和とは、みんなが幸せを感じることに。

という言葉がありました。自分の「生命」も、世界中の人々の「生命」も、同じ大切な「生命」です。私たち一人一人ができることから始め、すべての人が幸せに生きられるよう、前へと進んでいきたいです。

平和の鐘が、永遠に響き渡りますように。

平和はつくれる

白木中学校 三年 石田 さえ

六十八年前、八月六日の午前八時十五分、世界で初めて広島に一発の原子爆弾が投下されました。八時十四分までにあった生活は、この一発の原爆によって壊されたのです。

私は、八月五日と六日に、平和の使者として、広島県へ行ってきました。一日目、一番印象に残っていることは、広島平和資料館を見学したことです。本当は心が痛くなった事を覚えています。

ボロボロに破れて焦げた衣服、八時十五分でピタリと止まってしまっている腕時計、小学五年生が疎開先で学校の先生へ宛てた手紙、まっ黒になったお弁当。どれもこれも目を覆いたくなるような資料ばかりでした。それらを見た瞬間、心がしめつけられるように痛くなったことを覚えています。

「自分が、当時その場にいたら、どうなっていたのだろうか。」と何度も考えました。全身の皮膚が溶けた人間の写真を見た時の体のふるえは今も忘れられません。

たった一発の爆弾でこんなにも広島町の町が変わってしまったのか。と感じました。町が壊滅しただけでなく、被爆者や、日本国民の心に傷を負わせたのではないのでしょうか。

二日目は、広島市原爆死没者慰霊式・平和祈念式に出席しました。平和宣言や、実際にあつた話を聞いたときには、目頭が熱くなるのを感じました。被爆された方が差別されていたというお話などを聞き、もう、このような事は絶対に二度とくり返してはならない。と強く思いました。

私はふと考えました。平和とは何なのかを。平和とは、人と人が協力し合い、助け合い、一人一人の個性を尊重し、安心して暮らせる毎日、人々が幸せを感じられる毎日を送れる事ではないのでしょうか。

この平和をつくり出すには、お互いを想い、世界中の人々と交流をすることが大切なのだと思います。

普段、平和について考える事はあまりありませんが、あたり前に楽しく生活できていることに対して、感謝の気持ちを忘れてはいけなと思います。

私たち日本人は、核兵器の無い世界を望んでいます。ですが、今現在、世界には核兵器を持った国々が多くあるのです。

一九四五年、八月六日の原子爆弾が投下された事の怖さや恐しさを私たち自身に忘れない事、また、子孫や世界の人々に伝え続ける事が、私たち日本人にできる事なのではないのでしょうか。

核兵器の無い世界を作り上げる事は夢ではないのです。そこで私は、まず感謝の気持ちを多くの人に伝え、優しさと思いやりのあふれる社会を作っていく努力を少しずつでもしていきたいと思っています。

原爆を知る

訓原中学校 三年 政木 琴音

今から六十八年前の八月六日、広島に原爆が落とされました。

資料館には、変形したガラス瓶、焼けてしまったポロポロになった制服、八時十五分で止まっている時計など沢山の展示品がありました。中でも心に残ったのは、三体のろう人形です。この模型を見たとき、思わず立ちすくんでしまい、泣きそうになっていました。原爆が落とされたあの日、何十万という人が一瞬にしてあのような悲惨な姿になって、家族や友人が失われたのです。想像しても、しきれない思いや痛みに苦しくなりました。また展示品全てに心があって、現実で起きた事なんだ、と訴えかけられているようで、もし私がある場所に居たのなら、何百倍、いやもっと胸につきささったかもしれない。資料館にある展示品はほんの一部なんだ、という事を考え、もう二度と原爆を落とすことがあってはならないと改めて思いました。それと同時に、今まで自分がいかに幸せに生きてこられたのかを実感しました。

そして今年世界で行われた”核兵器の非人道性を訴える共同声明”に日本は署名をしませんでした。何故、署名をしなかったのでしょうか。唯一、原爆を落とされた国、日本。一番原爆の恐ろしさ、破壊力を知っているのではないのですか。日本は被爆国として核兵器廃絶を訴えていくべき、廃絶へのリーダーシップをとっていくべきだ、と私は思います。

二年前の福島原発事故。この事故は原爆と同じ事ではないのでしょうか。この二つの事柄が全く関係ないとは言えないと思うのです。そもそも原子力発電は核を使っていて、危険という事が初めから分かっていたはずです。事故が起きてしまった今、再稼働に向けて、動いています。しかし、核が無くならないければ、また同じ過ちを繰り返す事になってしまいます。原爆も原発も、人が努力すれば、止める事もできるのです。

今年、日本では原爆を経験した人の平均年齢が七十八歳をこえました。また、原爆を語る人も年々減ってきています。そんな中で、私達は原爆が落とされた事、戦争をした事を認識し直し、未来へと伝え、もう二度と同じ事を起こさないようにしなければいけません。核兵器が無くならない限り、恒久平和はないと思うからです。

今回の事業で私が「普通だ」と思っていた事は普通ではなく、とても幸せな事なんだと実感することができました。そして、世間の人々の「広島に原爆が落ちた」という認識が薄れていつている事も知りました。そんな中で、原爆について学ぶ機会をいただけた事を幸せに思います。今の私にできる事は、学んだ事をより多くの人に伝えていくことだと思えます。家族や友人など、身近なところから、戦争や原爆の悲惨さを伝え、平和な世界の実現を目指していきたいです。

ヒロシマと共に

熊野中学校 三年 森 水保

一九四五年八月六日、あの日の朝は警報も発令されず、人々は普段通りに生活していたそうです。おそらく、当たり前のように仕事場や学校へ行き、当たり前のように家族を見送っていたのでしょう。でも、出掛けた家族たちは、二度と家に帰ることはできなかつたのです。原子爆弾が投下されたあの一瞬で、ヒロシマの未来は変わってしまいました。

原爆資料館へ行った一日目、私は思わず言葉を失いました。折れ曲がった鉄の扉や、爆風によって座っていた人の影が黒く残った石の階段、どろどろになった瓦、黒こげになった弁当、そして八時十五分で止まったままの時計など、資料館にあった全ての展示物が原子爆弾の恐ろしさを物語っていました。中でも、ある児童が疎開前に通っていた学校の先生へ宛てた手紙の内容に、私は鳥肌が立ちました。その子は、何も悪くないのに、突然起こる空襲に恐怖を感じたり、まだ幼いのに関わらず、欲しい物を我慢しなければならなかつたりと、当時の日本の過酷さ、戦争の悲惨さに改めて気付かされました。

現在、広島市は六十七年前に原子爆弾が投下されたと思えないぐらい復興しています。しかし、町は復興しても、人々の心の傷が癒えることは決してありません。原子爆弾が投下されたこと、それは紛れも無く事実なのだから。今も尚、被爆と闘い、差別に苦しみながら生きている人がいるのです。

原子爆弾が投下されたあの瞬間、人々は一体、何を思ったのでしょうか。熱い、怖い、苦しい。そんな単純な心情では済まされたいはず。家族を探すため、焼野原となった町をさまよう人。何が起きたのか分からず、ただ呆然と立ちつくす人。被爆直後の人々の困惑した姿を想像するだけで、身の毛がよだちました。

多くの人の命と明るい未来を奪った核兵器。被爆者たちの願う未来に核兵器は存在しません。しかし、広島に原子爆弾が投下されて六十七年目となる現在もまだ、この世界から核兵器がなくなることはありません。日本は世界で唯一の被爆国です。だからこそ、忘れてはいけないあの日のことがあるのです。今、私たちができることは、核兵器のない未来が来ることを信じ、その恐ろしさ、悲惨さを訴え続けていくことだと思っています。そして、未来の子どもたちへこの想いを受け継いでいかなければなりません。

私がこれほど強く核兵器の抹消を望むこととなったきっかけがあります。二日目の広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式典に出席したときのことです。広島市のこども代表の「平和への誓い」。その力のこもった声に心を動かされたのです。だから、私は本当の平和な未来が来ることを、この先ずつと願い続ける。「平和の使者」として、原爆死没者、遺族の方々、そして被爆者と共に。

広島を訪れて

天神中学校 三年 橋本 真衣

私はこの夏、市の平和啓発事業の一環で、平和の使者の一員として、「広島平和記念式典」に参加させていただくことになりました。平和について考えられる良い機会だと思い、とても楽しみにしていました。

暑い日差しが照りつける中、広島市の平和記念公園を訪れました。

まず目に飛び込んだのは原爆ドームです。写真やテレビで何度も見たことがありましたが、実際に見てみると、屋根は鉄骨がむき出しになっていて空が見え、ドームの周りにはがれきが散らばっていました。大きく立派な建物を一瞬で無惨な姿にしてしまった原爆の恐ろしさを改めて感じました。

次に訪れた平和記念資料館にはたくさんの写真がありました。写真には、顔を被爆して皮膚が焼けただけの人や、やけどがひどくて、見た目では性別の判断ができない人など、目を背けたくなるような写真ばかりでした。

また、石段の一部分が展示してありました。何だろうと近づいてみると、石段には黒くぼくなった影がありました。そこには人が座っていて、原爆の熱によって影だけが残ったそうです。

その他にも黒くこげになった弁当や、びりびりになってしまった学生服などが展示してありました。原爆の悲惨さを物語るものばかりで言葉が出ませんでした。また、本当にこの世にあったことなのか、信じられませんでした。

八月六日、広島原爆投下から六十八年目の朝、平和記念式典には多くの人が参列していました。会場には全国から多くの千羽鶴が届けられていました。私も式典のしおりに挟まれていた折り紙で、鶴を折りました。たった一羽でしたが、精一杯平和への願いを込めました。

八時十五分、亡くなられた方々への冥福を祈り、黙とうをささげました。この平和な日本で、たった六十八年前に、この地が地獄絵図と化し、人々が水を求め、うめき、さまよっていたのだという事実をしっかりと心にとめていました。

そして、心にも体にも大きな傷を負いながら、命のバトンをつないで、日本の復興のために力を注いで下さった方々に感謝しました。

被爆者が高齢化している中、平和のために私達ができることは、戦争や原爆の恐ろしさを後世に伝えることです。たった一発の原爆が、希望も未来も打ち砕き、人生そのものを狂わせてしまうこの現実を、絶対に風化させてはなりません。唯一の被爆国である日本にしか果たせない責務があると思います。

核兵器がこの地球から、一日でも早く消えさり、二度とこのような悲劇が起こらないよう、祈っています。